

一八八三年二月二十五日(日)

タクール、聖ラーマクリシュナ、ドツキネーシヨル南神寺院において

ラカール、ラーム、ニティヤゴパール、チヨウドリー等信者と共に

独りで修行すること——フィロソフィ(哲学)——見神

タクール、聖ラーマクリシュナは、あの馴染みの部屋に昼食の後、信者といっしょに坐っておられる。今日は日曜で、キリスト暦一八八三年二月二十五日。

ラカール、ハリシュ、ラトウ、ハズラーの四人は、近ごろずっとタクールの許もとで生活している。カ
ルカッタからラーム、ケダル、ニティヤゴパール、校長などの信者たちが来ている。それにチヨウド
リーも来ている。

チヨウドリーは最近、妻に死に別れた。心の平安を求めて、彼はタクールにお会いするため、何度
か来ていた。彼は四つの学位を持ち、政府の役人をしている。

聖ラーマクリシュナはラームたちに向かつて——

「ラカール、ナレンドラ、バヴァナートは永遠ニティヤの完成者シッヅだ。つまり、生まれたときから目覚めている。

ただ人びとを導くためだけに、肉体に宿ったのだ。

もう一つ階級があつて、それは恵みの完成者という。とつぜん、あの御方のお恵みが下つて——そのとき、何の苦勞もなく見神して真実の智慧を獲た人だ。ちょうど、千年の間まつ暗闇だった部屋に光が入ると、一瞬の間にパッと明るくなるようにね！ だんだんに明るくなるんじゃないだよ。

世間で暮らしている人たちは、修行をしなけりゃいけないね。静かな処へ行つて独りになつて、心の底から渴望して、あの御方を呼ばなけりゃいけない。

チョウドリー、いくら学問しても、学問じゃあの御方はつかめないよ。

それに、あの御方のなさることは、いくら考えても誰にだつてわかるものか。——あの御方の蓮華の御足を信仰すること、これこそ誰にとつても必要なことなんだ」

〔ビーシュマ様のすすり泣き——勝ち負け——天の眼とギター〕

「あの御方の無限の力と富——どうしてわかるかね？ あの御方の行動がどうしてわかるかね？

ビーシュマ様は八天人のなかの一人だつたが——そのお方でさえ、矢の寢床に横たわつてすすり泣いていらつしやつた。こうおつしやつて——『不思議なことだ！ パーランダヴァ兄弟には、いつも神ご自身がついておられるというのに、それでも彼等の悲しみと災難は尽きないとは！』神さまのなさることは、誰にもわからないんだよ！

自分はすこしばかり礼拝や供養をしている、だからほかの人に勝つたのだ、と内心考えている人間

がいる。だが、勝ち負けはすべて、あの御方の手にあるんだ。ここで、一人の売春婦が、最期には目覚めてガンガーで死んだよ」

チヨウドリー「どんなふうになれば、あの御方を見る事ができるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「この目(肉眼)では見えないよ。あの御方が、神聖な天の眼を与えて下さると見える。アルジュナにご自分の普通の形相(すがた)を見せるとき、師(タケウシ)の神は彼に天の眼をお与えになった。

あなたのやっているフィロソフィ(哲学)というやつは、ただ、ああだろう、こうだろうと見積って、それを説明しているだけさ！——頭で考えるだけ。それじゃあ、あの御方はつかめない」

〔報(アヘト)を求めない(キ)信仰(バクテ)——肝心なこと——激情的(ライガ)信仰(バクテ)〕

激情的な信仰(ライガ)が持てたら——恋(こ)い慕(こ)う気持ちの信仰(ライガ)だ。そうすれば、あの御方もじつとしていられなくなる。

信仰(ライガ)は、あの御方にとつてどんな喜びか——油粕入りのマグサを、牝牛(メウシ)が大喜びするようにガボリ、ガボリと食べる！

激情的(ライガ)の信仰(ライガ)——純粹(ジュンジュン)な信仰(ライガ)——無私(ムシ)の、報(アヘ)を欲(ト)しがらない信仰(ライガ)だ。プラフラーダたちのような。

あんたが、金持ちでしかも有力な男のところへ、何一つ欲(ト)しがりもせず(ム)に毎日行く。その人に会(ア)うのが好きだから——。『何か用(ヨウ)か？』と訊(タ)かれたらこう答(コ)える——『はい。何も欲(ト)しいものはありません。あなた様に会(ア)いに来(キ)ているだけです』——こういうのを無私(ムシ)の信仰(ライガ)、報(アヘ)を求めない(キ)信仰(バクテ)というのだ。

あなたは神様に何も求めない——ただ好きになれ」

こう言われて、タクールは歌をうたわれる——

解脱がほしいと言うのなら

わたし(クリシュナ)は気軽に与えもするが

けれども純な信愛を

ほしいと言われては困るのだ

一八八三年六月二日に全訳あり

「いちばん肝心なことは、神様に激しい信仰を持つこと。それから識別と離欲だ」

チヨウドリー「せんせい、師匠グルにつかなくてはどのにもならぬものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「サツチダーナンダ(実在・智慧・歓喜—宇宙の本体)が師匠グルなんだよ。

シヤヴァ・サーダナ(死骸の上に坐って瞑想するタントラの修行)をして、いよいよイシュタ(信者の理想とする神の姿)を見る段になると、グルが目のまえに来てこう言う。『見よ、汝のイシュタなり』——そのあと、グルとイシュタは溶け合ってしまう。グルであるものがイシュタなのだ。グルは糸口をつかんで下さる。

無限者に拝礼するという。だが実際には、ヴィシシュヌを拜んでいるのだ。あの御方のなかに、神の無限の形相すがたがあるんだよ！」

〔聖ラーマクリシュナの提唱するすべての宗教の調和〕

また、タクルはラームたち信者一同に向かつておっしゃる――

「どんな(神の)姿を考えたらいいかと言えば、自分の一番好きな姿を想つて瞑想すればいいんだよ。けれども、どれも皆、一つのものだということを、よーつく心得ておけ。

神のどんな姿に対しても妬^たんだり憎^{にく}んだりしてはいけない。シヴァ、カーリー、ハリ(クリシュナ)、みんな一つの神がいろいろな姿をなさっているのだぞ。一を悟つたものこそ幸いだ。

外に拜むはシヴァ 心に慕うはカーリー

口に称えるのはハリ(クリシュナ)の名

情欲や怒りなどの感情がすっかりなくなると、肉体は保^もたなくなる。だから、お前たちはそういうものをなるとけ少なくするように努力していればいい」

タクルはケダルの方を見ておっしゃる――

「この人はいいよ。永遠のものも認めていらつしやるし、移りかわる遊^{リイ}びも認めていらつしやる。ブラフマンから神々の遊び、人間の遊びまでずーっとだ」

ケダルはいつも、タクルは神が人間の肉体をとつてこの世に顕れた御方だ、と言っている。

〔出家と女性——信仰心のある夫人〕

ニティヤゴパールをご覧になって、タクルルは信者たちにこうおっしゃる——

「これもいい境地だ。ニティヤゴパール、おまえ、あそこにあんまり行くなよ。タマにはいいがね。信者ではあるけれど、女の人じゃないか。だから気をつけなきゃ！」

出家にはたいそうきびしい戒律がある。女の人の絵さえ見ではいけない。世間一般の人たちには、とうてい出来ないことだ。

たとえ、どんなに信心深い女の人でも、それでも気ままに出入りするのとはよくないよ。情欲をすっかり抑えられるようになっていても——多くの人の手本になるためには、出家の戒律をちゃんと守らなくてはいけない。聖者や出家が十六アナ(完全に)欲を捨てているのを見て、他の人びとは捨離クとすることを学ぶんだからね。そうじゃなかったら、みんな落ちていくばかりだ。出家はこの世の導師ゾルなんだから」(訳註——十六アナ＝ルビーなので100%、完全を意味する言葉)

やがて、タクルルと信者たちは立ち上がってそのあたりを散歩した。校長はプラフラータの絵の前に立って絵を眺めていた。プラフラータは、報アヘトクキいを求めない信仰バクティを持つていた、とタクルルがおっしゃったからである。